２０１３年度日本漢文学研究推進室シンポジウム「１９世紀の東アジアの思想文化と漢学」
２０１４、２，２４　於台湾　清華大学

明治期における漢文の意義
――三島中洲の文を中心に――

二松学舎大学　文学部　牧角悦子

要旨

日本近代国家の幕開けともいえる明治時代において、「漢文」は如何なる意義を持ったのであろうか。近代が西欧の価値の導入の時代だとすれば、前近代的価値の中心にあった「漢学」と、それを支えた「漢文」は、当然その価値を失うはずである。確かに近代的価値観の定着に随って、漢学的価値は漸次その意味を失うかに見える。しかし一方で近代的価値の吸収を可能にしたものが、実は日本人の漢学の素養であったことも事実である。新しい価値観は旧来の価値観の否定の上に成り立ったのではなく、知識人の精神性の中ではむしろ漢学による高度な知的修練こそが、近代的価値をより正確に吸収する基礎となったのである。

明治初期における漢文は、西欧の価値観を導入する一つのツールとなっただけでなく、新旧の価値観をつなぐ精神的役割をも果たすものであった。その一例を三島中洲の漢文の中に探りたい。

三島中洲は明治を代表する文章家であった。残した「文」の中でも特に重要なのは碑文である。それは貴人高官から無名の庶民に至るまで、その一生の軌跡と文化貢献を顕彰してバリエーションに富む。三島の碑文は漢文というものが、明治においても一つの重要な文化的価値を有したこと、その背景に漢学的価値に対する根強い信頼があったことを物語る。本論では、倉敷の名家となった野崎家の起家の物語ともいうべき「野崎武左衛門伝」を通して、三島の漢文が持った当時的価値について論じたい。

明治時期漢文的意義

－以三島中洲之漢文創作為探討中心－

二松學舍大學　文學部　牧角悅子

論文摘要

明治時代可說是日本走入近代國家之序幕。而在這樣的時代中，「漢文」的存在意義究竟為何呢？如果將近代視為導入西歐價值觀的時代，那麼象徵著日本前近代價值中心的「漢學」以及支撐漢學體系的「漢文」，就理應失去其存在的價值。確實，隨著近代性的價值觀漸漸轉為主流意識，漢學中所蘊含之價值觀念也看似逐漸失去其存在的意義。然而若換個角度來看，使人們得以吸收近代價值觀的基石，事實上正是日本人的漢學素養。新來的價值觀並非是立足於舊有價值觀的否定之上，相對地，不如說對日本知識份子而言，正由於在他們的精神中已蘊含有透過漢學所獲得的高度知能鍛鍊，才使得他們得以更加正確地吸收近代性的價值觀。

明治初期的漢文不只是導入西歐價值觀的工具之一而已，它同時也發揮了銜接新舊價值觀念的精神性作用。是故本文欲以三島中洲之漢文作品為中心，以探討出此現象之一例。

三島中洲為明治時代具代表性之漢文作家。在三島所留下的「文」章創作中，尤以碑文最為重要。這些碑文所描述的對象從達官貴人到不知名的市井小民皆有，是三島為彰顯這些人物一生的軌跡以及其在文化上之貢獻所創作，文章內容富有多樣性。三島的碑文，正說明了漢文即使到了明治時代仍具有一重要的文化價值，且其創作是以知識人對漢學價值觀的堅韌信任感為背景之事實。本文將透過探討「野崎伍左衛門傳」一文（此文可說是日後成為倉敷之名門的野崎一家白手起家的故事），來論述三島之漢文於明治時代所擁有之當世價值。

２０１３年度日本漢文学研究推進室シンポジウム「１９世紀の東アジアの思想文化と漢学」
２０１４、２，２４　於台湾　清華大学

明治期における漢文の意義
――三島中洲の文を中心に――

二松学舎大学　文学部　牧角悦子

はじめに

日本近代国家の幕開けともいえる明治時代において、「漢文」は如何なる意義を持ったのであろうか。近代が西欧の価値の導入の時代だとすれば、前近代的価値の中心にあった「漢学」と、それを支えた「漢文」は、当然その価値を失うはずである。確かに近代的価値観の定着に随って、漢学的価値は漸次その意味を失うかに見える。しかし一方で近代的価値の吸収を可能にしたものが、実は日本人の漢学の素養であったことも事実である。新しい価値観は旧来の価値観の否定の上に成り立ったのではなく、知識人の精神性の中ではむしろ漢学による高度な知的修練こそが、近代的価値をより正確に吸収する基礎となったのである。

明治初期における漢文は、西欧の価値観を導入する一つのツールとなっただけでなく、新旧の価値観をつなぐ精神的役割をも果たすものであった。その一例を三島中洲の漢文の中に探りたい。

三島中洲は明治を代表する文章家であった。残した「文」の中でも特に重要なのは碑文である。それは貴人高官から無名の庶民に至るまで、その一生の軌跡と文化貢献を顕彰してバリエーションに富む。三島の碑文は漢文というものが、明治においても一つの重要な文化的価値を有したこと、その背景に漢学的価値に対する根強い信頼があったことを物語る。本論では、倉敷の名家となった野崎家の起家の物語ともいうべき「野崎武左衛門伝」を通して、三島の漢文が持った当時的価値について論じたい。

一、明治期の漢文と山田方谷・三島中洲

○明治期における漢文重視

明治期、新しい国民教育の為に、漢文教育が重視された。それは表現のみならず内容においても近代国家としての明治政府が求めた一つの日本文化、理想的国民像を背景に持つものであった。日本人の精神性の中心にあった儒教の愛国忠君思想は、経世済民を実現したい新政府にとっても大きな有効性を持つものだと認識されたに相違ない。愛国と忠君、勤勉と殖産興業、それが国家の理財経営に直接結びつくことを、この時期の漢文教育は強調している。漢学・漢文はこのように、近代国家としての日本明治期にあって、旧時代の旧文化として排されたのでは全くなく、日本的近代を支える精神理念と見做されていた感がある。そしてその背景には江戸期の漢学の水準の高さがある。

○江戸漢学の水準の高さ

江戸末期に日本の漢文文化は最高に成熟し、漢詩文の作成のみならず経典の解釈学や政治理論・修身理念としても高い水準を獲得する。中でも荻生徂徠の経典理解（『論語徴』）などは中国本土においても不動の評価をかちえていた。九州では亀井南冥・昭陽父子が論語・春秋の解釈に新境地をひらいたことについては、昨年九月に貴校において報告を行った通りである[1]。また、漢学とくに経学は、理念と実践の双方に現実的な力を発揮し、藩政改革や対外政策に実際的な行動規範を提供した。その最も典型的な例の一つが山田方谷の藩政改革であろう[2]。方谷の漢学の実践はその理念の高さ、現実把握の正確さ、そして意志の強さにおいて、他の漢学者の追随を許さない。強い意志を以て改革を断行し、松山藩を守り抜いた方谷はしかし、明治新政府の招聘は受けず、明治以後は政治的世界から身を退け、教育という別の価値の中に余生を送る。

○三島中洲の義利合一論

山田方谷に見られた漢学の実践は、弟子の三島中洲に受け継がれる。中洲は明治政府に官僚として仕え、方谷とは別の形でそれを実践していくが、方谷に無く中洲にあったもの、それは「義」と「利」の融合という新しい価値の正当化である。「義」すなわち理念の正しさと、「利」すなわち現世的利益の追求とは、厳格な漢学者にとっては絶対矛盾の中にある。しかし中洲は利益の追求に理念的正しさを融合させる「義利合一論」を唱え、明治の殖産興業、富国強兵に大きな正当性を与えた。中洲の漢学は明治政府にとって、時代のニーズに答える有効性を持つことによって利用価値の高いものになっていく。

このように、江戸末期から明治初期における漢学は、実は現実的有効性によって大きな力を発揮していた。それは決して一部の学者や趣味人たちの消遣の対象ではなかった。時代の、そして新国家建設の精神基盤の確立の為に有効な手段として活用された漢学の応用は、また国語の教科書における漢文の重視という形で表れてくる。

二、明治期の教科書教材と三島中洲の文

浅井昭治「旧制中等学校における漢文教科書と山田方谷・三島中洲の詩文」
（三島中洲研究会編『二松学舎と日本近代の漢学』）

※旧制中等学校において漢文教材として多く採用された。

三、『中洲文稿』に見る三島中洲の「文」へのこだわり

牧角悦子「三島中洲の文について」
（戸川芳郎編『三島中洲の学芸と生涯』雄山閣出版　平成１１年）

---

[1]牧角悦子「亀井南冥『論語語由』の学術性」（台湾国立清華大学国際四書学史研討会　２０１３年９月）。

[2]方谷の漢学の理念と実践については、牧角悦子「山田方谷と諸葛孔明――漢学的理念とその実践――」（二松学舎大学人文学会『人文論叢』第８９輯　２０１２年）。

『中洲文稿』全四冊

・『中洲文稿』第一集　明治３１年（１８９８）

書一篇　策三篇　論五篇　碑文三〇篇　序一五篇　記二〇篇　伝三篇　雑文八篇

・『中洲文稿』第二集　明治３３年（１９００）

書一篇　碑文五四篇　序二〇篇　記六篇　引二篇　書後五篇　賛・説各一篇　講義・雑文各二篇

・『中洲文稿』第三集　明治４４年（１９１１）

碑文四七篇　記一九篇　序一四編　書・伝・賤・引・その他二二篇

・『中洲文稿』第四集　大正六年

碑文五九篇　序一五篇　記一三篇　その他八篇

※碑文が圧倒的に多い。

独創的というよりは形式的な文章

・形式を重んじ、取材に基づく事実を重視しつつ、生前の功績を称揚する。

・対象が広範囲。：貴族・子弟・友人・無名の一般人など。

・「人」を描いてその生涯を後世に記録として残すことに対する使命感を持つ。

四、野崎武左衛門伝

昭和初期の漢文教材に山田方谷の文として「野崎武左衛門伝」を載せる（昭和１２年　山口察常編『実業帝国新漢文』、北村澤吉編『実業新選漢文』）。この伝は、本来は三島中洲が書いた銘文（野崎翁墓碣銘）であり、『山田方谷全集』第一冊には「三島毅代作」とある。以下に全文を示す。

「野崎武左衛門伝」（野崎翁墓碣銘）

味野塩之名、聞于天下。而創之者、野崎翁。翁諱弼、称武左衛門。本昆陽野氏、号多田屋。備前兒島郡味野村人。』翁幼穎悟有心計。而孝父母。年甫十二三、家道衰替、奉養不給。弱冠娶妻。一日語之曰「貧窶至此。不可坐待斃。吾有一策。請借汝匳具」妻承諾。乃売易白布、夫妻早夜裁縫以製襪。身負担行売近郷。居四五年貨稍殖。又多畜奴婢助製、遠転販于芸・讃・防・長間、得利益多。乃蹶然興曰「何以此区区者為。但由此為資、庶幾可以伸吾志耳」味野村與赤崎村、瀕海接連多潟鹵。翁請官、自資金、築隄捍潮。起於文政十年成於十二年。得塩田拾陸町、采両村偏名曰野崎浜、遂更今氏。於是養丁煮塩。塩味絶佳。四方商舶来買者、陸続不絶。村民因鬻薪炭・酒茶等物、得業者不少、殆成一小港矣。天保二年又築于日比村、得塩田参町肆段、名曰亀浜。両浜塩税加入官。四年、蒙賞陞大里正格。九年、従胸上至沼入村、逶迤築堤防至十二年而成。得塩田貳拾町余、名曰東野崎浜。戸口日繁、鶏犬声相聞、自成一村落。官為置里正。嘉永元年蒙命築于福田村、二年竣功。周囲凡四里、得村五、得稲田伍陌肆拾町余。六年為五村大里正。後有築于邑久郡久久井村者、中途資尽，請翁成之、得塩田参町弱。又有墾于北浦者、中廃。翁乃継成焉、得稲田若干。凡翁先後所開墾地、連亘于兒島海湾十数里間、而稲塩之入、利官民者、実不些云。弘化四年国侯大嘉其功、賜五口糧、許称姓佩刀。翁既興公利而私財亦随殖、号為一国素封冠。元治元年正月、俄獲疾、沈綿半歳、至八月二十九日而没。春秋七十有六。』翁骨貌魁偉、長踰六尺、眼光炯炯射人。而色温気和、以敬上愛下。屡献金若塩以補国用。毎凶荒、多捨米

塩金鈔、以賑郷里。国侯賜冬夏章服或金帛等物、前後褒賞不可殫記。』毎燕居、集子弟僕隷、懇戒曰「国侯天也。敬天受福」又曰「人能倹於自奉、而不吝於施人乃可。苟吝而蓄財、與瓦礫何択焉」故翁恤窮周貧、千金不惜。而身守節倹、垢衣糲食如一窮人。』余聞翁風、大有所歎称焉。乃叙其概略。

・困窮した一村民が奮起努力して興業し一代で巨万の富と栄誉をかちえた物語。
・強い志を以て殖産興業に努めた点を称揚。
・富を貪ることなく「利官民」つまり地域と公共の利益に貢献。
・公共への貢献に対して「国侯大嘉其功」公式な表彰を得る。
＊自らの努力によって巨万の富を築いた一村民が、清貧を守りつつ地域と国を豊かにすることを志した様を描き、利益の追求を個人の修身のレベルで昇華させ、富国と道義の両立（義利合一）を提唱する内容が特徴。
＊一民間人の生涯を、事実に即して具体的に描きつつ、さり気ない典拠の使用によって漢学的（儒教的）価値観を暗示するが、文章の勢いによってそれが教訓的ではなく物語的に展開されている名文だと言える。

まとめ

明治期における漢文は、和文による表現がまだ成熟していなかったこと、「文」のもつ漢学的素養を背景に持つことによって、正統な表現手段として重要な価値を持った。碑文・銘文や伝記という文の格調を求められる分野においては、「漢文」で書くことそのものが、高い価値をもったのである。「漢文」で書く以上、そこには当然儒教的「文」の価値が反映する。それは経世済民と美刺、すなわち現実批判の精神である。儒学の持った正道意識と現実対応への姿勢を、「漢文」は表現そのものの中に抱え持っていたわけである。

それは一方で皇漢学と呼ばれる一統崇拝を支える儒教的教学に結び付くと同時に、思想性を離れて、公文書の作成という極めて現実的な要求に答える手段となって大きな需要に答えた。

しかしその双方において、暫時的な価値が失われた時、漢文の実質的な衰退がはじまる。それは口語文つまり日本語表記の成熟と、そしてまた民主主義という新しい価値の浸透によってもたらされる。ただしそれは、明治の初期ではない。実質的な近・現代への価値の転換は、漢学と漢文に支えられて近代的西欧の価値をスムーズに受け入れた日本文化が、漢文・漢学から離れて、新しい表現ツールを獲得した時に始まるのであろう。その次の展開を見極めるためにも、「漢文」の意義への視点は有効であると考える。